リアリズム編』（自由国民社、二〇一〇）の解説の中で、次のように述べる。

一九七八年から八〇年にかかるあたりで、「現代児童文学」は大きな転換点を迎える。たとえば、これまでの向日性や理想主義を尊ぶ考え方では忌避されがちだった家庭崩壊や死、性といったテーマがとりあげられた作品の翻訳が相次ぎ、いわば「タブー」が崩壊したとの認識が起きてきた。また、従来は恒久的なものと考えられていた「子ども」観が、「近代」に入って以降につくりあげられた一つの観念に過ぎなかった、というフランスの歴史家アリエスの説が紹介される一方、家庭内暴力や校内暴力が社会的な問題となり、「荒れる子どもたち」を目の当たりにして、もはやこれまでの「児童文学」に対する考え方では立ちいかないことが実感されるようになった。

と、児童文学をめぐる状況について触れた後、次のように書く。

八〇年代の幕開けを感じさせたのは、『ぼくらは海へ』だった。そこでは結束することのない少年群像が描かれ、さらに終盤で船出した少年二人の生死について、結末を読者にゆだねたオープン・エンディング（開かれた結末）とされた。完結が当たり前とみなされてきたことからすれば、テーマのみならず手法の面でも、タブーは破られた、といえるだろう。

僕が一九八〇年あたりを「第二期」の始まりとするのは、宮川や佐藤の捉え方と重なりつつも、それらは「一つの側面」というふうにみる。『ぼくらは海へ』も含めて、作品そのもので第二期の始まりとするのには無理がある。僕は、第二期というのは、作品そのものが変化した（もちろん、それもあるが）というより、児童文学の枠組み、あるいは位置づけ、読まれ方が変わったところに、その変化の本質があると考える。枠組みというところから比喩的にいうならば、第一期（六〜七〇年代）の児童文学が「単線」だったのに対して、第二期の児童文学は「複線」になったのだ。急行もあれば各駅もあり、一方で特急もある。そのどれかだけで児童文学を語ることは無理になったのだといえよう。また、位置づけ、読まれ方という点からみれば、（かなりに乱暴な括り方ではあるが）第一期において児童文学は言わば「人生の教科書」的な存在として意識されていたが、第二期以降はもはやそうしたあり方ではなくなった、というふうに捉えることができると思う。

2

まずは「複線化」ということだが、それをもたらした一